



昭和、平成、令和と、時代に順応した予備校の創造をめざして

2019年に創業52周年を迎えた東京アカデミーは、専門予備校のリーディングカンパニーとして業界を牽引してきた。理事長の佐川は、関西学院大学を卒業後、1970年に同社に入社し、1988年に父親である先代から理事長を引き継いで、いまは2代目理事長に就任している。入社当時は拠点も東京、大阪、名古屋の3カ所だけで、受講生も2000名程度だったが、佐川が2代目理事長に就任して以降、本社を東京から大阪に移すとともに、全国展開を積極的に進めてきた。

「本社を大阪に移したのは、特に深い理由があったわけではありません。私は関西で生まれ育ったので、関西が好きなんです。それに、なんでも東京というのでは、おもしろくないじゃないですか（笑）」

と、佐川は淡々と語るが、全国展開についてはかねてから、ぜひ実現したいと思っていたのだという。その思いを実現し、理事長を引き継いだ当時の3拠点から、いまでは全国32都市75拠点とし、さらに出張講座も数多く展開している。受講生の数

も1万人だったものが27万人と、27倍も増えたことを思うと、感慨深いものがあるようだ。

「先代からの『合格者をたくさん輩出して地域社会に貢献してもらおうことで、弊社も同時に社会貢献したい』という思いが、受講生の心に響いたからだと思います。

先代は、常に地域貢献、社会貢献を第一に、堅実に講座の募集、運営を行うことを考えていました。『自利』は誰にとっても当然で、『利他』の視線がなければ事業は長続きしないという考えが、根底にあったように思います。

多くの受講生から支持され、弊社がここまで成長できたのも、常に講座や講義内容を更新することを心がけ、受講生からいただいた受講料を必ず還元し、受講生に親切にするという点が、評価されたからではないでしょうか。

創業52周年を迎えられたことに感謝しつつ、あらためて初心に戻り、これからも先代の教えを守りながら受講生サービスに努めるとともに、受講生のニーズを的確に把握して、時代に順応した予備校を創造していきたいと思います」

と語る佐川は、今後も公共性や公益性の高い職業をめざす人の試験対策をバックアップしていくという事業方針に変わりはないが、常に社会の動向を見すえ、時代



東京アカデミー 常務取締役
佐川宏治

に見合った資格があれば講座を増やしていくことも考えている。ただし、ひとつの講座の募集と運営を堅実に軌道に乗せないまま、次の講座を手がけるようなことはしないと、固く心に決めている。

ところで、事長である佐川は、自身の後継者についてどのように考えているのだろうか。

佐川はこれまで、父である先代理事長から社会貢献への思いを受け継ぎつつ、東京から大阪への本社移転、全国展開、資格試験から就職試験への展開など、時代と社会のニーズに応えるかたちで東京アカデミーを大きく成長させてきた。こうした佐川の実績は、跡を継ぐ後継者にとっては大きなプレッシャーにもなるかもしれない。その点について佐川に尋ねると、次のような答えが返ってきた。

「後継者候補として、長男の宏治がいま常務を務めているのですが、宏治は公認会計士の資格を取得しており、弊社に入る前は約10年間、大手監査法人に勤務して、

大企業の監査を担ってききましたので、私とはまた別の視点で東京アカデミーを経営してくれるのではないかと期待しています。私の苦手なITや数字にも強いですからね（笑）」

かくいう佐川は、大学は文学部の出身で、シャガールの絵画をこよなく愛し、映画にも造詣が深い文化人だ。

一方、公認会計士の資格を持ち、ITにも精通する宏治は、これだけ聞くと佐川とはまったく違うタイプのようには思えるが、先代から佐川が受け継いだ思いは宏治のなかにもしつかりと引き継がれているようで、受講生への対応においては、生講義へのこだわりなど、東京アカデミーが大切にしている「アナログ」的な部分を残しつつ、事務作業などにおいてはIT化を推進することで、効率化を図ろうとしているという。宏治により、「東京アカデミーのIT革命」と言っても過言ではない新システムが導入され、本書の執筆にあたり取材に応じてくれた社員たちも、実際、宏治が入ってきてからは、IT化によりオフィス環境が劇的に変わったと、口々に語っていた。

東京アカデミーはこれまでも、社会に役立つ人材を多数輩出することで社会に貢

献してきた。しかし、少子高齢化が急速に進み、人口減少社会に突入した日本では、これまで以上に地域社会を支える有益な人材が必要とされている。それだけに、東京アカデミーが社会で果たすべき役割は、今後ますます大きなものとなるはずだ。

東京アカデミーにとって、昭和、平成、令和と受け継がれた52年間は、まだほんの通過点にすぎない。今後もより多くの合格者を世の中に送り出し、その人たちが社会貢献に力を発揮することが、東京アカデミーの100周年へと結びついていくのだろう。よりよき社会と未来の実現に向けて、これからも東京アカデミーのためまぬ挑戦は続く。